

---

# 幻想夢十夜

穂邑雪奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想夢十夜

### 【Nコード】

N5306J

### 【作者名】

穂邑雪奈

### 【あらすじ】

夢の世界を往く人が語る、夜明けまでに見た夢の話

## 第一夜 機械仕掛けのジュリエット（前書き）

形式は夏目漱石の「夢十夜」みたいな……全然雰囲気違いますが。

各話は互いに無関係で独立しています。

## 第一夜 機械仕掛けのジュリエット

こんな夢を見ました。

とある道行きの途中、私はジュリエットに会いました。

まるでプラネタリウムのように、美しい、丸い星空の下でした。

彼女はロミオを待っているのです。そのためにとびきりお気に入りシルクのドレスを着ておりました。月長石のような色のドレスを着ながら、ジュリエットはさめざめと泣いておりました。星のよくなきらめきの水晶を鑲めた、華奢な小靴を履いた白い足を投げ出して、泣きじゃくっているのです。

「もう少しでわたくしの螺子が切れてしまうのです」と彼女が訴えました。

「このままではロミオ様を待つこともできない」

ジュリエットはどうやら発条仕掛けで、なるほど、彼女の繊細な背中からは、大きな真鍮の発条が突き出ているのです。ジュリエットがあまりにも悲しげでしたので、哀れに思われ、私はその発条を巻いてやりました。けれどもジュリエットはさめざめと泣きつづけるのです。

「ロミオ様はいついらっしゃるかしれません。あの方をお待ちしている間に、いつ螺子が切れてしまうかもわかりません。どうか、ロミオ様がいらっしゃるまで、私のそばで螺子を巻いてくださいませ」ジュリエットはそう言つて、私の服の裾を掴んで離しません。

しかしながら、進まねばならぬ身であった私は、断りました。するとジュリエットは存分に手入れのされた黒髪を振り乱し、「ああ、ああ」と声を上げて泣くのです。真珠やサファイアをあしらった銀の髪留めが彼女の膝元に落ちておりました。

「このままではロミオ様を待つこともできない。螺子の切れたわたくしをご覧になって、あの方はどうおもわれるでしょう。そのような姿をロミオ様にさらすのは嫌です」

私はジュリエットの傷ひとつない腕と発条を見比べ、彼女の腕は発条に届かないのかと尋ねました。ジュリエットは届くと答えました。ならば彼女自身で発条を巻けば良いと思ったのでそう言いました。

「だけれどもわたくしには螺子を回す力が無いのですもの」

そんなはずは無い、と私は思いました。私はジュリエットには発条を回す十分な力があることを知っていました。誰にだって発条は回せるものです。ですので、私はそう言いました。ところが、ジュリエットは頑なに首を振って、

「わたくしには螺子は巻けないのです」と言い張るのです。

そのうちに東の空が、私が行かねばならない刻限が迫ってきたことを知らせたので、私はジュリエットを置いて歩き出したのでした。

## 第二夜 アリスと霜漬けの私

私は長いこと横になっておりました。

指の先がちつとでも動かぬよう、よくよく気をつけて、じつと地面に寝そべっておりました。

私は一面びっしりと霜に覆われておりました。随分と昔から、霜だらけでした。無論、最初からそうであつたわけはございません。ですが、私が霜に覆われていなかったのはいつだったのか、それを忘れるほどには、昔の話でした。

頭天边、黒髪の本一本、その根元から先端まで、爪先の先、並んでいる十の紫色の爪、笑つても泣いても怒つてもいない顔のすべて、罅割れた唇、睫毛の本一本、その先に、鼻の天边に至るまで、真白に埋め尽くされているのでした。

息を吐くと、霜が融けてしまうので、私は用心して、できるだけそつと息を吐かなければなりませんでした。心の臓の鼓動一つ一つに至るまで、霜の欠片が融けてしまわぬよう、私から落っこちてしまわぬよう、気を配っておりました。

それは大層寒いことでした。小さな氷が、私の皮膚すべてに、覆い被さっているのです。涙の一滴が霜を融かすのでなければ、泣いてしまいたくなるほどに、冷たいものでした。

けれども、それ故に、霜が私を覆っている間は、誰も私に触れることはありませんでした。日に当たると霜は融け、乾いてしまうものでしたから、私はどんなときも日の差さない日陰に潜んでいましたので、通りがかかる者も滅多におりませんでした。そうつと殺した息のため、私に気づく者も稀でした。

時折、私に気づいて、不思議そうに覗き込まれたりもしました。

「なにをしているの」

と尋ねられることもありましたが、私が唯一つ動かせる眼球を動かしてその人を見ていると、大抵そのうち何処かへ行ってしまうもの

でした。

そうやって私は長い時間を過ごしておりました。

すると、どこからか、弾む足取りで駆けてきた者がおりました。私のそばを通り過ぎようとして、それから私に気づくと、驚いて、足を止めてしまいました。それは、幼い少女でした。

「あなた、だあれ」

私は答えず、ただぐりと眼球を動かして、彼女を見つめました。なぜだか、少しだけ、眩しい思いをいたしました。それはどうも、娘の髪が太陽の黄金色だったからでは、ないようでした。

「あたし、アリス」

誰も訊いてはおらぬというに、アリスは屈託なく名乗りました。そして、何も起こってはいないというのに、それは楽しそうに笑うのです。私は、どうしたらいいかわからず、戸惑ったものの、黙ったままでした。アリスは、私の目を覗き込みました。

「寒くはないの」

とてもとても寒かったのですが、誰かに触れられるよりはましだと私は思いました。

「あたし、ウサギを探しているの。あなたは、知らないかしら。変なウサギなのよ。ほら、あそこにいるわ」

私はぐりと眼球を動かして、アリスの指差したほうを見つめました。

それは確かに変なウサギでした。シルクハットに、チェックのベスト、金色の懷中時計を持ち、メガネをかけて、どこか気取っているようでした。けれども、そのようなウサギはおかしくはあっても、珍しくはないものでした。私が凍りついている間も、何度も風の噂に聞いたものでした。

「あたし、あのウサギを追いかけてなくちゃいけないわ」  
それはいけない、と私は思いました。

なぜなら、ウサギはアリスなぞに頓着せず、好きなところを通って好きなところに行くに決まっているからです。アリスはきつと途中

で道に迷うでしょう。さもなければ、ひどい怪我を負うでしょう。どこかの意地の悪いチェシヤ猫に騙されるかもしれません。あやつは人をからかうのがとても好きな、性悪なのです。

私はどうやってアリスを止めるべきか、思案しました。しかし、その間に小さな黒い靴をはいた小さいアリスは今にも駆け出していきます。

「行つてはならない」

ようやくのことで絞り出した声は酷くしわがれておりました。私の耳にそれは不快でした。ぱきぱきと、唇の霜が剥がれて落ちていきました。

「なぜ行つてはならないの。お母さまは止めないわ」

アリスの母親はきつと、ウサギの恐ろしさをご存知ではないのです。よう。それは幼いアリスにはとても危険なことです。

「それでも、行つてはならない」

「話にならないわ」

アリスは私の話に耳を傾けることなく、くるりと白いレースのついたワンピースを翻し、弾む足取りで駆け出しました。私はアリスを守らなければなりません。

「アリス、アリス」

ぱらぱらと霜が落ちていく腕を振って、私はアリスを呼びました。

「アリス、私を連れて行つて」

私を連れて行けば、きつとアリスは大丈夫だろうと私は思いました。私はウサギがどんなに大変なものか、よく知っています。チェシヤ猫を追い返すことはできなくても、アリスに近づかせないようにはできるでしょう。いかれ帽子屋を見分けることもできるのです。

アリスは、少しだけ振り返って答えました。

「一緒に行きたいのなら、早くいらっしゃい。ウサギがいなくなってしまうわ」

硬く冷たく強張った足を動かして、私はやっとの思いで立ち上がりました。



そんな足で歩くのはとても怖いことで、私はしばらく躊躇って立ち尽くしておりました。すると、後ろから、そっと押す者がおりました。仏頂面の、ハートの女王でした。

「アリスを追いかけるのではないのか」

仏頂面ながらそういうものだから、女王が愛しく思われて、思わず私は笑って、礼を言いました。そして女王に手を振って、私はアリスを追いかけました。

きらきらと輝く霜が、後には落ちていたのでした。

そうやってアリスの後について回っていると、霜漬けの男を見つけました。

彼は、日の当たらぬ地べたに、じっと横たわっておりまして。

それを見た私は、懐かしさと同時に、憎しみを感じました。その憎しみは決して彼へのものではなかったのですが、私は彼から目を逸らし、アリスを急ぎ立てて、その場から立ち去ろうとしました。

三步ほど進んで、どうしても気になってそこへ戻ると、もう彼はそこにはいませんでした。

霜があまりに冷たいので、立ち上がって向日葵を探しに行ってしまったと、風が囁きました。

彼がその向日葵と歩いているところを見たと言う者に、三十歩ほど歩いてから出逢いました。

### 第三夜 紅冠鳥と薔薇の棘

なぜだかはよくわからないのだけれども、薔薇が私を刺すので、私は悲しんでおりました。あの小さな棘で、ちくりちくりと刺すのです。

なぜだろう、と私は本当に悲しい思いをしました。

きつと薔薇は私のことが嫌いなのでしょう。赤く美しい薔薇には、私の地味でありふれた容貌が気に入らなかったのかもしれませんが、それとも、私には身の覚えがないけれども、気づかぬ間に、薔薇の気に障ることであったのでしょうか。

ですから、私はなるたけ薔薇の側には寄らぬようにしておりました。用心深く、その鋭い棘に触れないようにしておりました。

けれども、薔薇は私の友人である露草の隣に咲いていたもので、時折顔を合わせることもございます。すると、薔薇はふいと顔を背けて、口を噤んでいるのでした。

薔薇と紅冠鳥は大変仲の良い友達同士でした。どちらも真赤な見栄えがする者同士、二人で楽しそうに笑っていると、それはそれは華やかでございました。紅冠鳥と露草は、紅冠鳥が薔薇を訪れる間に親しくなり、その縁で私も、紅冠鳥と言葉を交わすようになりました。そのうちに、紅冠鳥と私は、連れ立ってあちこち回るようにもなりました。

ああ、思い出してみれば、薔薇が私を引っ掻くようになったのは、その頃からであったように思われます。

薔薇は、私が紅冠鳥を取ったりしないかと恐れているのでしょうか。けれども、紅冠鳥と私が連れ立って歩くのは、薔薇と露草が歩けないからで、少し仲が良くなっても、紅冠鳥が私よりも薔薇のほうが好きなことは違いありませんし、私が紅冠鳥よりも露草のほうが好きなことも変わりありません。

紅冠鳥と薔薇は大層仲が良いのです。偶さか喧嘩をすることもあり

ます。そういう時は、きまって紅冠鳥が謝りに行くではありませんか。気位の高い薔薇は決して自分から謝ったりはしないので、紅冠鳥はあの甲高い声でいつも己が頭を下げねばならない不公平さについて一頻りひつしき文句を言った後、薔薇の元へまっしぐらに飛んでいくではありませんか。

取ったりしないのに。

そう呟いてみても、こちらを向かない薔薇には聞こえようもありません。

まったく、私は腹が立ってきました。

そんなにも紅冠鳥と一緒にいたいのなら、薔薇であることを止めればよいのです。なぜなら、紅冠鳥が紅冠鳥であることを選んだのは紅冠鳥自身ですし、同じように薔薇が薔薇であることを選んだのは他でもない薔薇自身なのです。薔薇ではなく、鶯になると決めていれば、一緒に飛び回ることもできて、紅冠鳥と私がこれ以上親しくなることもないのです。

けれども、薔薇は大変に気位が高いので、きっとそんなことはせずに、薔薇のままにいますでしょう。そして、私が紅冠鳥とともにどこかへ行くと共に、あの小さな棘で私を引っ搔くでしょう。

ですから、私はなるたけ薔薇の側には寄らぬようにして、用心深く、その鋭い棘に触れないようにしているのです。

### 第三夜 紅冠鳥と薔薇の棘（後書き）

この話だけ、特定の女の子が出てきていませんね（ex：ジュリエット・アリス）。

紅冠鳥：冠が紅いと書きながら、実際には全身緋色の小鳥のこと。  
ベニカケス。

## 第四夜金魚鉢の中の星空

まるでとびきり高級な水晶でできているような、丸い透明な金魚鉢の中に座って、ウエンディは星空を作っていました。

私にはとてもできないことですが、ウエンディは非常に器用に、自分よりも大きな鋏を使いこなして、薄い銀色の紙を、細かく切り刻んでいるのです。

その大きな鋏で、彼女の白桃色のドレスのそこかしこに、まるで揚げ菓子にかけた粉砂糖のように、大量に縫いつけられたフリルを切ってしまうのか、その細く小さい指を切り落としてしまわないか、私は心配でなりません。

「大丈夫よ」

とウエンディは言います。

「小さい頃から、ずっとこの鋏を使っているのだもの。大丈夫よ」けれども私は心配でなりません。

「この小さく切った銀色の紙を、壁中に張ったら、きっと、とっても綺麗よ。星空みたいに見えるわ」

ウエンディは楽しそうにそういうと、大きな鋏をいつそう一生懸命に動かして、小さな星の欠片をたくさん作り上げているのです。

ウエンディが入っている、大きくて透明な金魚鉢を見上げて、私はウエンディに、この金魚鉢から出たことはあるかと尋ねました。

「ないわ」

ウエンディはこともなげにそう答えました。

しかし、金魚鉢の中から星空なんて見えるわけありません。なら、ウエンディは星空を見たことなんてあるのでしょうか。私がそう訊くと、ウエンディは頬を赤らめて、微笑んで答えました。

「一度ね、お父様の知り合いの誰かが星空の写真を持ってきてくれたことがあるの。一度だったけれども、漆黒のびろうどの上に、銀を溶かして振り撒いてあったのよ。きらきらしていて、素敵だった

わ

ウエンディは夢見るように言うと、鍔をより急がせました。

「だからね、私も、星空を作るのよ。だって、とても美しいのだから」

ああ、と私のついた嘆息は、ウエンディには聞こえなかったようです。

私は迷いました。ウエンディに本当のことを言うべきなのでしょう。か。星空は、びろうどの上に銀の欠片を撒いたものではないということ。星空は決して手の届かぬ空の遥か高みにしかないものだということを。

丁寧に大きな鍔で切り刻んだ銀色の紙の細切れを、ウエンディは一つ一つ、金魚鉢の壁に貼り付け始めました。透明な壁に貼られた小さな欠片の向こう側に、ウエンディが隠れてしまします。これでは私の声も届くかどうか。

ああ、と私は再度ため息をつきました。

私はどうしたら良いのでしょうか。私には、ウエンディを丸い部屋から助け出す術がありません。丸い金魚鉢の口は、上にしか開いていないのですから。私に翼があれば、話は別ですけれども。

そうしているうちにも、ウエンディは銀色の紙を壁に貼り付けていきます。白桃色のサテンのドレスが、あちら側に隠れていきます。助けを呼ぶべきかと考えました。しかし、誰を呼べば良いのでしょうか。私はすっかりわけがわからなくなっていました。

ああ、と、今度はため息ではなく、叫び声でした。

誰か、誰か、ウエンディを助けられる人がいたのなら、彼女をあの丸いガラス球から連れ出してあげてください。そして彼女に星空を見せてあげてください。

誰か、誰か。

東の空が、私が行かねばならない時刻を教えていましたので、もう私はそれ以上そこにはいられませんでした。

叫びながら、ウエンディを助けられない己の不甲斐の無さに泣きな

がら、私はそこを歩み去るしかありませんでした。  
随分と行ってから振り向くと、流れ星が一筋見えました。それは、  
まるで、ウェンディの金魚鉢に向かって伸びていくような、綺麗な  
一筋でした。

## 夢五夜 白雪姫は地に堕ちて

こんな夢を見ました。

それはそれは美しい天使が、硝子の棺に納められて眠っておりまして、私は大層驚きました。黒檀のような黒髪に、雪のように白い肌、血のように赤い唇。目を閉じたそのさまはどこかしら精巧な作り物めいてみえました。天使の造形が神の御手によるからでしょうか。

私が、なぜこのようなところで眠っているのかと問いますと、天使はほんの僅かに目を開けて答えました。

「私はもう天使ではないからです」

ほら、翼もないでしょう、と天使はゆっくりと背を見せてくれました。ああ、確かにその美しい線を描いた背中からは、白い羽は生えておりません。

いったいどうしたのかと私はなおも問いました。天使は私の執拗な質問に嫌な顔ひとつせず、丁寧に答えてくれました。

「はじめは、王妃が求めたのですよ、美しい赤子を」

彼女が喋るひと言ひと言のたびに、彼女の口元の透き通る玻璃に息が吹きかかり、そこだけうつすらと白く、丸く曇りました。

「私はその願いを叶えるために、天から遣わされたのです。私は、王妃の求めたとおりの美しい赤子となってこの世に生れ落ちたのです」

天使は、細く繊細な指で黒髪に触れました。艶やかでたつぷりとした黒髪は、確かに天からの贈り物に相応しい、星屑のような輝きを持っております。

「はじめは王妃は非常に喜んで、私を大層慈しんでおりました。それなのに、王妃はもう私を必要としないのです」

悲しげに、天使は目を伏せました。

「人とは誠に勝手なものです」



いったい、なぜ王妃は心変わりしたのでしょうか。私の疑問に答えて天使はその美しいかんばせを曇らせました。

「王の心が王妃から離れたのですよ。そして離れた心は、私へと行き着いたのです。そうして、かつて私を望んだ王妃は、私を疎ましく思うようにまでなつたのです。殺したいとまで願うほどに」

私は何も言えなくなつて、ただそこに立ちすくんでおりました。不意に、背中を冷たいものが這うような思いがいたしまして、私はぞつとしました。いったい何事かと思えば、天使が微笑んでいるのでございました。血のように真っ赤な唇に、美しい笑みが刷かれているのでした。とても美しい、ですのに、なぜ、血の凍るような思いがするのでしょうか。

天使は独白のように続けます。

「私にはわかりません。どうして私が憎まれなければならないのか。私はただ、願いを叶えるためだけに、この地上に降りたというのに

自分勝手な人間。愚かで浅ましい人間」

ああ

私は嘆息せざるを得ませんでした。理解してしまったのです。

あなたは、復讐を望んでいるのだろつという私の問いに、天使はなおも微笑みながら頷きました。

「なぜ、いけないのです？」

悲しい天使。そのために、彼女はもう天使ではないのです。

「心を決めた途端に、羽は碎けて散りました。あれほど大切にしていたというのに、傷つくだけでこの身が引き裂かれるほど痛んだというのに、いざなくなってみれば、身が軽くなつただけとしか感じません」

天使、天使、と私は呼びかけました。思いとどまるべきだと、諭しました。

天使は聞く耳を持たず、ただ玻璃の棺の中で笑うばかりでした。羽を失つてもなお、天使の笑い声は、鈴を振るような、耳に心地よい

笑い声でございました。天使は地に落ちても天使なのでございますよう。

「もう、手遅れなのです。そして、後悔はしておりません。たとえば、あの天上に戻れずとも」

さあ、と彼女は促しました。

「そろそろお行きなさいませ、夜が明ける前に」

天使よ、天使、と私は呼びかけました。悲しくはないのかと聞きました。羽を失ったことも、母と呼んで愛した人に裏切られ、復讐をすることが。

天使は言葉を途切れさせ、それからゆっくりと答えました。

「悲しいからこそ」

そこから先は彼女は口を噤んでしまいましたし、私は彼女が言ったとおり行かなければならなかったので、天使とはそれっきりでございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5306j/>

---

幻想夢十夜

2010年10月9日04時39分発行